

内田魯庵全集

13

翻 訳 Ⅱ

ゆまに書房

内田魯庵全集 第十三卷

四、八〇〇円

昭和六十二年一月十日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 文勇堂製本工業(株)

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町
電話(二九二)〇七九八
振替 東京四一六三一六〇

内田魯庵全集第十三卷／翻譯Ⅱ・目次

戦塵	七
ゾラ『戦塵』の後に書す	五四
彫像師	六一
二人畫工	一一七
イワンの馬鹿	二〇五
人間の要する土地幾許ぞ	二五三
革命婦人	二七七
解題	三八五
解説	四〇一

翻

譯
Ⅱ

戰
塵

戰 塵

(一)

麗かな夏の午後である。メルリエー阿爺の水車場は頗る結構な休日であつた。三脚の卓子は庭に持出され、楡の大木の蔭に端と端とを聯ねて列べられ、そして客人の來るを待受けてゐた。そこら界限に流布する風説では、メルリエー老人の娘フランソアと村の若者ドミニクとの結納披露の當日であるさうだ。此のドミニクは仕事の餘り好きでない代りに、凡そ三リーグ以内の婦人が必ず細い眼を燦らして顧眄つて見るという至極の幸福者であつた。

メルリエー阿爺の水車場は實に最も絶勝の地で、大路の急に折れる邊即ち村の中心を占めてゐた。此村には唯だ一本筋の道があるばかりで、兩側には屋根の低い白く塗つた民家が軒を列べ、道が曲る邊には廣々した原が幾箇所もあつて、モーレルの流を沿ふて生茂る大木は低い窪んだ谿間を愉快い日蔭にしてゐる。ローレヌ州には此處ほど景色の秀れて佳絶なる地は無い。左右の鬱葱たる森には數百載を経たる立木

の大王が傾斜の阪に翳然として翠の海を天際に漲らし、遙か離れて南方は不測に豊かなる沃野で、碁盤目の如く生垣で數限りなく區劃られてある。されど此村の評判の高慢は七八月の酷熱をすら忘るゝ綠蔭の涼味である。モーレル河はガギーの森より出でて凡そ數リーグの間翠滴たる木下蔭を流れ、涓々たる咽聲と共に森の嚴肅な影を漂はし來る。が、此處の涼しい源因は是ればかりでなく、四邊の木叢から幾條となく水が流れて奔湍急流を涉らずば一步も進めぬ程で、且つ萐苒深く埋めたる地の下は一面の湖で木根若くは巖石の隙間を利用して其處此處に清冽なる飛泉を迸らす、其聲は合して鏗々として大鷲の鳴音をも鎮めて了う。是れ恰も四面に瀑布落つる仙境の景である。

下なる廣野も荒れ果てゝ居らぬ。藁々たる數株の栗樹は濃黑なるインキ色の蔭を作りて、原の縁を添ふて白楊樹が噪つける木葉の壁の如く列んでゐる。其原を横斷して荒涼索莫たるガギーの古城に達する二條の古き楓の列樹路がある。此地には曾て旱魃の災なく、惣ての花丹草木、蕩然として鬱生したれば、左右の森に挟まれたる低き地は自然の庭苑で、蒙茸たる野は恰も芝生の如く、其間に點綴する巨木は盛んに茂りて宛たる花床である。且つ正午の酷烈なる光線を直射する時は、滿地に濃青の蔭を印して葉越の清風をそよ／＼と通はし一段の涼味は頗る掬するに足る。

メルリエー阿爺の水車が面白さうにがたく、するは實に斯る場所であつた。第一、木と土とで建てられた水車小屋は一見開闢以來のものと思はれて、其基礎の一部は恰度此處で清澗なる小沼を作るモーレルの水で洗はれてゐる。そして數呎の高さある水堰を裕に越えて落つる水で廻る古い水車は軋る度毎に長らく

奉公した老僕の喘息の咳の如く呻く。けれども車を變へると勧めらるゝ時はメルリエー阿爺は必ず首を掉て勸告を退け若い車は横着で且つ仕事に馴れぬから駄目だといふ。で、手近にあるもの、古い大樽の壞片、錆びた鐵や亜鉛や鉛の斷片を以て修覆しては用ひる。そこで古車どのは次第に伊達な扮装をして、此奇妙な粧飾の上に搦てゝ加へて苔蘇や草や種々の色彩を處々に施こしてゐる故、清麗な透徹る水を湛る時は憔悴したる老態が恰も眞珠或は金剛石等の寶石を鏤めたものゝ如く見えた。

水車小屋の一部はモーレルの流に洗はれて、偶然何處やら古風な弦門らしき蹟を残した。床下には水が通ひ、深い穴が數ヶ處有つて、此土地切つての名代な鰻と蜆蟹の漁れる場所で、瀧壺の水は鏡の様に透徹つて、水車が休んで泡立たぬ時は一隊の魚群が徐かに壯嚴なる旅團運動を試んで潑刺するが見える。流に下りる破れ掛つた段の近くには杭があつて其杭に小舟が繋いである。水車の上に架する木造の階廓の窓は順序を揃へるでもなく列んで、てもなく全軀が穴や隅や壁の一部や後から考へて其處此處と纏足したものや桁梁や屋根の不測な取合で、恰も古い荒れ果てた寺の面影である。然るに蔦や他の蔓草が十分に手を延ばして破損の箇處の見えなさ過ぎる程親切に秘して此破屋に緑の葉衣を着せてゐる。若い貴婦人達が此處を通れば必ず立留つて其手帳にメルリエー阿爺の水車場を圖取りせぬ者は無いさうだ。

道路に向いたる側は夫れほど不規則では無い。門内の敷石を行くと庭に出る。其左右には既に家畜小屋とが列んでゐる。井戸の傍には楡の太木が蒼然として其蔭は殆んど庭半分を蔽ふてゐる。門と向合て突當りは即ち家で、其屋根の巍然たるは鳩舎で、其階下には四ヶ處の窓が、ちんとして規則正しく列んでゐる。

る。で、メルリエー阿爺が自分で許す唯ツた一つの道樂は十年毎に此家の正面を塗變へる事である。丁度此物語の時分は新たに白く塗らればかりで、正午の日光が照らす時は全村を輝かすほどである。

二十年間メルリエー阿爺は村長を勤めてゐた。資産の爲めに大尊敬を得てゐたが、其資産は多年貯蓄した結果で凡そ八萬法に當るさうである。マデライン、ギラールと結婚して其嫁資たる此水車場を貰受けた時は、メルリエーの資本は唯だ腕二本だけであつた。けれども嫁御のマデラインは其腕を見込んで撰擇を悔ひもせず、婿君メルリエーは一心になつて其共同事業に力癪を入れた。今では大切な唄衆に死なれて一人娘のフランソアを抱へた男鰥と取殘されて了つた。随分休息して年寄の水車を莓苔の中に眠らせる事もあるが、遊ぶのも餘り退屈過ぎて家が死んだ様に思はれる。から復た樂みに稼ぎ出す。此頃のメルリエー阿爺は脊の高い老人で、面長な、ついぞ笑つた事の無いむツつりした、しかし其陰氣な中に何處やら、しかも爪の垢ほどでなく、多量の愛嬌が覆れてゐる。で、財産の爲めと、一つには勿體らしい容子で再び村長に撰ばれた、恰も娘に聳を取る此時分に。

フランソアは丁度十八歳に達した。小作りであるお庇に村の美人の中に數へ込まれなかつた。十五になる迄は十人並にすら行かなかつたから、村の有志の若者共はメルリエーの双親揃つて健康で頑丈であながら如何して娘を育て損なつたかと不測がつてゐた。然るに十五になると、矢張纖細な小作りではあるが、遽に面變りがして思ひやられる至極愛くるしい可憐な美人となつた。黒髮黒瞳に加ふるに薔薇の如き美はしき色を帶び、口許には常に笑を含み、頬には愛嬌を寄せ、天の榮幸は美しくしき眞白の前額に終始宿す

様である。勿論、此界限に往來する娘連の中では、小振であるが、中々瘦せてゐるところでなく、小麥の俵を肩に擔ぐ柄ではないが、一年増に幅が生て今にも傾て鷓鴣の様に丸々と肥つて甘さうになりさうだ。しかし父の寡言な氣風を亨けて、若い娘の癖に考勝ちで、口許に笑つてゐる時があつても、之は人に愛想を振播く爲めで、元來の氣性は質素な方である。

しかしまだ人から希望を掛けられるには不足する故、此足下の土地に棲める候補者の少年は誰しも娘の容貌よりは家の資産を目的とするは是非もないわけだ。であつたが、娘は到頭近所界限の茶咄となり笑草となつた掙擇びを行つた。モーレルの向川岸にドミニク、パンケーの名で通る脊の高い美丈夫であつた。元來此土地の出生でなく、今より十年前白耳義から伯父の財産を相續しに來たので、元は丁度水車場と向合つて僅か彈着距離四ツ五ツを距て、ガギーの森の境界線に接した小さな土地で、爰に態々來た目的は賣拂つて直ぐ故郷へかへる筈だと、當人も左様云つた。けれども歸らぬ處を見ると或は此土地が氣に入つたのかも知れぬわい。で、原の隅をはじくり返して僅かばかりの蔬菜を作りて其日の活計としてゐた。其間には漁獵を専らとして、折々所有主から勸解に持出され、殆んど法律に觸れんとした事も一度位でなかつた。斯る一風の生活を送りて、其財源の頗る確かならぬ處から、結局惡名を着せられて、唯だ漠然と魚や鳥の盜賊以上に見られなかつた。且つ怠情者で、團仕事に出てゐる筈の時間に草原に寐てゐたを見付けられたも度々である。其上に森の端なる木蔭の小家が正路の少年の住居とは見受けられぬ。婆さん達は此ドミニクがガギーの城跡の狼と交を善くするといふ噂を聞いても随分當然の事として不思議がるまい。

しかし若い娘連は態々立留つて恍然する。ドミニクは立派な美丈夫の標型で、素性怪しい曲者だが、脊高く昂然として若木の白楊樹の如く、乳色の肌膚と、日の照る時は金色に見える赤色の毛髪鬚髯と、何處に一つ點の打場がないワ。さて或る朝、到頭事が持上つた。水車場の秘藏娘が此色惡にオツ惚れて、どうでもぐゝ外の男に嫁入せぬとメルリエー阿爺に言出した。

想像つても解る、メルリエー阿爺が此日に娘の言葉を聞てどつきり、胸に膺へたのは。平日の癖で一ト言も云はぬが、例の思案に暮れた容子が顔色に現れて、内部から泡立つて漲るゝ滑稽が形を秘して了つた。フランソアも矢張冷然として凡そ一週間は親も娘も無言でゐた。メルリエー阿爺が首を傾げて怪しんだは夫の家畜盜賊の破落戸が如何して首尾よく娘を誑し込んだ乎である。ドミニク奴は曾て水車場に出て來た聲は無いのに、こいつ呑込めぬワエと、水車の男を間牒にして探偵させると、モーレル河の向河岸の草叢に寐轉んで假寐入する粹な姿を見つけたから、事の始末を注進して感賞に預つた。フランソアの部屋から丁度此寢姿が見えるから、必然之れに釣られたに違ひない、二人は水車越に互に味な眼附をして到頭腐れ合つたに違ひないワ。

一週間は經つて了う。フランソアは愈々冷然とする。メルリエー阿爺は矢張何にも云はずにゐる。すると或る晩、自分の勝手に斷もなく唐突にドミニクを伴れて來た。恰度フランソアは晚餐の膳拵へをしてゐる時で、事の意外なるに呆れたが、呆れたばかりで口へは出さず、更に一人前の準備をした。けれども争はれぬもので、嬉しさは包み切れず、遽に莞爾き出して可愛らしい唇が復た現はれて來た。メルリエー阿

爺は此朝秘密と森の端の小屋を訪ねて、窓も戸も閉切つて凡そ三時間ドミニクと商議を凝した。何を相談したものかは誰も知らぬが、小家を出る時メルリエー阿爺がドミニクを息子待遇しただけは確かである。此ドミニクは若い女を引掛けやうと草叢に轉がつてゐたとは云ひながら、案外立派な人物であるとメルリエー阿爺が見届けたは恐らく疑ふに及ぶまいテ。

愈々ドミニクが水車場に呼ばれたと聞いて村人は手に手を携へて見物に出掛けて來た。女連は戸口に屯集して各互に思ふまゝの百轉りをしたが、メルリエー阿爺が此碌でなしを家内に引込んだ馬鹿々々しさは沙汰の限りで、此馬鹿々々しさを遺憾なく評するに足る十分勁拔な警語は中々思當らぬ位だ。けれどもメルリエー阿父の所存は本より村の囂衆や鐵棒のてんやわんやを度外に見てゐる。云ふなら何とでも勝手に云はして置くベエ。自分がマデラインを水車場附で嫁に貰つた時は矢張裸一貫の文無しだったが、それだからと嫁御を大事にする親切な良人たるを更に妨げなかつたを見ると、何も案じる事は無いので。果してドミニクは水車場に來てから生れ變つた様に身を粉にして出精する。有繫口喧ましい村の者も此働態に我を折つて呆れ果て了つた。すると恰も水車場の厮童が運惡く當籤して徴兵に取られた。ドミニクは其後釜を雇ふを聞入ないで、自ら穀俵を運び、荷馬車を追ひ、古い水車が剛情を張つて回轉るを嫌ふと強に相撲合つた、加之も遠方から態々働態を見物に來るほど愉快らしく元氣に骨を折つた。メルリエー阿爺は無言で輾然いて己れが觀察の誤らざるを鼻高くして喜んだ。戀ほどに若い男を勵ますものは無い。

眞黒に働いてゐる此最中にフランソアとドミニクは互に美しく崇拜し合つてゐる。碌に言葉は交さぬ

が、嫣然たる微笑は云ふに優る思を運ばして、メルリエー阿爺が無言であるを敬重して、何時か心底を打明けて目出度く婚禮を許して呉れる日の来るを楽しんで待つてゐた。終に此七月の中旬の吉祥日、三脚の卓子を榆の大木の蔭に持出して、午後から村の知人を招いて饗筵を開いた。

さる程に來賓悉く集りて席に就き、各々酒杯に満酌した時、メルリエー阿爺は前額より高く盃を捧げて云つた。

『皆の衆に御吹聴申しやす。私ン處のフランソアと此男とを今日から一ト月ベエ經ちやして、聖ルイの祭日に婚禮させベエと思ひやす。』

同時に酒杯と酒杯と相觸るゝ音鏗然として滿座は笑ひ哄いた。けれどもメルリエー阿爺は哄然たる中に鈍聲張上げて云ふ。

『ドミニク、お前の鼻様になる私イ娘に接吻さツしやい。吉例の祝義だツてエ事よ。』

二人は顔を眞紅にして接吻した。滿座は愈々哄き渡つた。で、滞りなく小さい樽を空けて一同は散會となり、残るは内端の親身の友達ばかりで、しめやかに睦まじく語り合つた。其中、日はトツブリ暮れて紺青の天空は一面に星を雨附らして頗る朗かである。ドミニクとフランソアとは腰掛に聯んで二人共無言であつた。

一人の老人は近頃皇帝が普漏西に對して宣戰を布告した一條から、村の壯丁は悉く招集せられ既に昨夜軍隊は此處を通過した始末ゆゑ、頓て大騒動がオツ初まるべえと物語つた。